



佐藤

SAKABAYASHI

隨筆特集

至高の陶醉



金刀比羅宮蔵 寛政6年(1794年)円山応挙 晩年の作(部分)

220余年の伝統の技が贅をつくした「燿」きらめき。

讃岐の金毘羅酒として親しまれ、きまじした金燿が、酒づくりの贅をつつておくりだした「燿」燿酒。燿酒の歴史は今をさかのぼること三〇余年の寛政元年。当主八代目であった西野嘉右衛門が、金毘羅さんの舞ではじめた酒づくりがその第一歩。以来、金刀比羅宮のご神酒として栄誉をうけ、その丹精こめた手づくりの味は、金毘羅詣の人々から最も親しまれ、きまじした。燿酒「燿」のえも言われぬ風味と「燿」には、金燿の心意気と酒づくりの神髄が相まじり、ついでています。

真珠玉のやとく搗きあげ

水品のやとく研ぎすました酒造好適米(山田錦)

燿酒「燿」に使っているのは、酒造好適米の中から選びぬかれた最高の大粒米。これを丹念に高度精白し酒の雑味等の原因となる外層部を削り、磨き、吸水のよい、粟粒よりやや大きい、玄米のわずかなる割合での、まるで真珠玉のようなだけの酒米とする。これを、良質の寒の水でくり返くり返し研ぎすまし、本格的な酒づくりの仕込みへと移っていく。

昔から「麴、二甃三造り」といわれ、りんとおのり複雑多岐にわたる工程を熟達杜氏がつとめてきた。手づくりの微妙精緻な燿を誕生させたのです。

芳醇なこく、口あたりの爽やかさ、喉ごしのよさ、まさに燿酒の芸術品。この稀なる燿酒を、日本酒をこたく愛するみなさまに「燿」と味わいつくしていただきたい。



燿 金 陵
超特撰

ラベル右下に記しております番号は、一本一本責任をもって製造いたしました品質の証し。ご入手いただいた貴方さまだけの番号です。

税込 標準価格 10,185円 1.8L
5,093円 720ml

西野金燿株式会社 香川県仲多度郡琴平町四六三 電話(0)八七七七三三三三

未発着の燿酒は保証書と入れ、紙箱中や授賞期の燿酒は必ず受け取り。

酒林

SAKABAYASHI

隨筆特集



涸林

SAKABAYASHI

随筆特集

DJポリスを輸出せよ 池井優 4

困った訪問者 高橋和島 6

「八重の桜」の八重 安森敏隆 8

ほろ酔い詩歌紀行——白秋「九十九島」 日高昭二 10

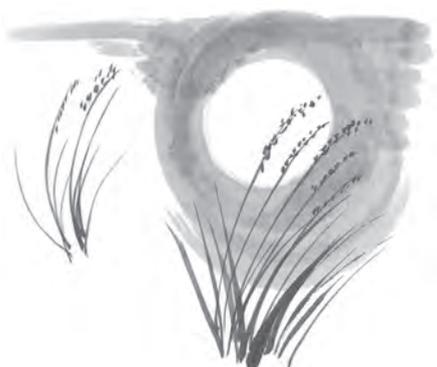
喜びの一日 内野潤子 12

「創刊一〇〇年 三田文学名作選」を読んで 宮地智子 14

糖尿病とガン——世界糖尿病に寄せて 杉本忠夫 16

絵と文 ④ ポインセチア 中西美子 19

故郷 志村有弘 20



小説風・江戸神仏歳時記(27)

— 王子稻荷神社と装束稻荷

絵と文 四十年 佐川毅彦 … 22

現実体験の純化 志村栄守 … 23

丁寧に誠実に淡々と 片岡義男 … 25

土佐脱藩の道を行く 山西靖彦 … 27

絵と文 夏の家のコテイジ さかもとふさ … 29

眠むれぬ夜に 永岡慶之助 … 30

TAXI 山本千明 … 32

丑に引かれて善光寺参り 宮本富夫 … 34

郡 順史 … 37

表紙・グラビア…おいら

DJポリスを輸出せよ



池井 優

(慶應義塾大学名誉教授)

DJポリス

「お巡りさんも心の中でワールドカップ出場を喜んでいます」「お巡りさんだってこんな良い日に怒りたくはありません」「皆さんは十二番目のサポーターです。そういう危険な行為はイエローカードです」……………。

日本がオーストラリアと引き分け、ワールドカップ出場を決めた夜、渋谷駅前のスクランブル交差点で熱狂するサポーターに向かって呼びかけた警察官、その巧みな誘導で「お巡りさんコール」が起こったほどであった。この

男性警察官と同僚の女性警察官に警視総監賞が贈られ話題となった。二人の警察官はいずれも二十代、ハメを外す若者たちにどう呼びかければルールを守らせることができるか、アイディアを出しながら、文言を練ったという。

男性警官は宮城県出身の二十四歳、二〇〇八年に警視庁へ入庁、一〇年に第九機動隊に配属され、一二年九月から広報係に就いた。広報係とは祭りやデモなど、雑踏警備の現場でアナウンスを通じて注意を促し、群衆を安全に誘導する役割を担う。十ある機動隊ご

とに三人ほどの広報係がいるという。広報係には初級、中級、上級と三ランクあり、この男性警官は五月に上級に昇進した。では、そのトレーニングと昇進はどのようにおこなわれるのであろうか。

初級はさまざまなケースの静止画を見ながら、中級、上級は動画を見ながら、アドリブでアナウンスする試験に合格しなければならない。花火大会で押しあい、へしあいする群衆を誘導する時はこんな機転のきいたアナウンスがなされる。「ここで耳寄りな情報ですよ。これから並ぶ方、あちらの列がすこーしだけ短いです」

初詣の明治神宮では「列に割り込まないでくださいね。神様が見ているかもしれませんよ。少なくとも私はみえていますからね」。人ごみでいらいる参拝客の気分がほぐれる。

このDJポリスの存在はインターネットや海外メディアでも話題となり、警察や警察官による不祥事が相次ぐなか、久々の明るいニュースとなった。

フリーガンの出現

海外、特にヨーロッパではサッカーの試合会場の内外で暴力をおこなうフリーガンが問題になっている。フリーガンの発生は産業革命に関連してくる。小さな手工業的な作業場に代わって各地に機械設備による大工場ができ、工業都市が成立しはじめたのは、一七六〇年代のイギリスにおいてであった。そうなるど労働者がこうした工業都市に集まってくる。彼らの楽しみはサッカーであった。ボールひとつあればプレーできる手軽さ、ルールもラグビーほど複雑でないこともあって、彼らは自ら楽しむと同時に各工業都市を中心に金をとっていいプレーを見せるプロのサッカーチームの誕生によって週末に地元チームを応援することになった。地元チームが勝てばいい気分一杯やり、仲間と喜びをともにするが、負けると面白くない、憂さ晴らしとして大声を出したり、暴力を振るったりする。

はじめは試合の結果に昂奮した感情

を反映したものであったが、やがて試合内容に関係なく意図的に暴動を引き起こすようになった。その特徴は、酒を飲み酔っぱらった状態にある、十代から二十代の男性が中心、いくつかの小集団が示し合わせたように集団行動をとり、暴徒化する、試合の日時、その内容に関係なく暴れる、石、レンガ、ガラス瓶、木材、ナイフなどを携行し、乱闘や破壊活動をおこなう、時に外国人排斥、宗教的差別の態度をとる、団結する……などだ。彼らはフリーガンと呼ばれ、イギリスからオランダへ、さらにヨーロッパ各国に波及するにいたった。

一九八五年五月、ベルギーのブラッセルでおこなわれたUEFAチャンピオンズカップ決勝戦の折発生したフリーガンにより暴動は三十九人の死者がでる大事件となった。これをきっかけに根本的なフリーガン対策がとられるようになり、監視法の制定、敵味方のサポーターを引き離す工夫、厳重な警備などによりスタジアム内のフリーガ

ンによるトラブルは姿を消した。一方、スタジアム外で街の店のショウウインドウを壊す、物を盗むといった行動が発生した。フリーガンの暴力は国境を越える。二〇〇二年、FIFAワールドカップ日韓共同開催大会の際は国外からフリーガンの大量流入が懸念された。その入国阻止を目的として出入国管理及び難民認定法にフリーガン条項の規定を加え、入国管理局と警視庁の連携により、決勝戦終了まで六十五名に及ぶ札つきのフリーガンの入国を拒否し、水際で食い止めたのだ。

日本のサッカーファンも熱くはなるが、夜の街で大声を出して道路を占拠し、喜びを爆発させることはあっても、器物を損壊する行動などにはでない。ヨーロッパにDJボリスのアイデアを輸出せよ。暴徒になる前にユーモアで軟化させることは可能か。少なくとも参考にする価値はあると思うのだが…。

困った訪問者



高橋 和島

(作家・郷土史家)

今夏のとくべつ暑い日の昼下がりのことだ。

家人が趣味の教室へ出掛けていたため、わたしは居間で独り、レンタルビデオを観て過ごしていた。

田舎町の住宅地にある家だから、特別暑い日だったからといっても、クーラーはつけていない。したがって、い

つものように窓を開放していた。

南に面した居間の二メートルほど先は根元が大人の太腿ほどの直径の百日紅で、その向こうに郵便受けの塀め込まれた大谷石の塀と通りがあった。

テレビ画面に向けていた視線をなんとはなしに戸外に転じた私の目に飛び込んだのは、百日紅の幹に巻き付

いた蛇だった。

驚愕したわたしはだらしなく悲鳴をあげ、長椅子から跳ね起きると窓際に向かい、こわごわ百日紅のほうに目を凝らしてみた。

青黒い色をした蛇はかなり大きい。二メートル近くありそうだ。

青大将に違いないと見当をつけた。とすれば、毒蛇ではないから、差し当たって噛まれてどうこうという心配はない。

ひとまず胸を撫で下ろし、まずはダナを観察することにした。

歓迎できぬ訪問者は百日紅の幹に身を巻き付けてゆるゆると上へ登ってゆく。途中で横に張り出た枝の方へ移動し始めた。

「ふーん」

息をのんで見つめるわたしは唸った。やがて――、ダナは枝の上で上半身を直角に起こし、上の枝へ首を巻き付けて身をくねらせ登り移った。

わが家の百日紅の上下の枝の間は四、五十センチというところか。その

間を一本の青黒い棒が繋ぐ恰好になつたのである。

通りにバイクを停めた若い郵便屋さんがわが家の郵便受けに歩み寄ってきたのは、ダンナが二本目の枝へ移動する動作にとりかかったときだった。

童顔の郵便屋さんは目敏く百日紅に巻き付いた異物に気付き、ぎよつとした顔になり、首を伸ばして目を凝らしたあと、「わつ」と叫び後ずさりした。

害のない青大将だからと教えてやっただが、彼は顔を強ばらせ、郵便物をわたしに手渡すと、「蛇はホントに厭だ」と眩き、早々に逃げ去ってしまった。

また独りになったわたしは郵便屋さんと同じ言葉の口にしなから、悠然と旅を続けるダンナを眺める。

百日紅を上の方に這い登った青大将は稍まで行かず、途中で引き返し降りてきた。そして今度は大谷石の塀の上に移動し、時間をかけて貫禄たっぷりに這い進み、松の枝が覆い被さるアルミ製門扉の上に長々と鎮座なされた。

これは放っておくわけにいかぬ、と

思った。小さな貧相な家と庭だが、ダンナが気まぐれで棲みつく気にならぬともかぎらない。そうなつたらえらいことだ。

わたしはとつさに隣家のご亭主殿の顔を思い浮かべた。七つ年下だが、生まれも育ちも地元の人だけに何事にも明るく、頼りになる。しかも自営業なので家にいるはずだ。

善は急げ。早速裏口から出て隣家へ走った。

出てきた彼に事情を話し、家へ来てもらった。

「へえ、なかなかの大物じゃないですか」

門扉の上で悠然と辺りを睥睨する敵を眺めたお隣さんはにやにやしなから言った。棲みつかれてはかなわないので追い払ってもらえぬかと頼むと、

「いや、それはもつたいないな。蛇は縁起がいいんですよ。わしの実家では死んだじいさまが屋根裏に棲みついた蛇にとまどき御神酒を供え、大事にしてましたよ」

滅相もない。どんなに縁起がよくとも青大将と同居するのは厭だと、顔色を変えて頼んだ。わたしの狼狽ぶりを笑ったお隣さんは、早速仕事に取り掛かってくれた。

つまり――、門扉の傍へ歩み寄ると、両手をひよいと敵に向かって伸ばし、左手で首根、右手で尾を掴んだのである。

驚いて目を剥くわたしに彼は言った。「けつこう重いな。それに奴さん、

躰をつっぱらかしてやがるんで力が要りますよ」

歩き出したお隣さんの後に付いて行く。

団地の共同駐車場脇の草むらに、青大将を放り投げた彼は、砂でも払い落とすように両手をぽんと叩き、眩いた。

「青大将は鶏卵や小鳥など好む美食家ですが、蒲焼きにして食べたことのある友だちが固くて不味かったと言っていましたよ」

旨いものならおれも食べてやったのにとれう口ぶりであった。

「八重の桜」の八重



安 森 敏 隆

(同志社女子大学教授
ポトナム短歌会代表)

今年、NHKの大河ドラマ「八重の桜」が始まり、福島と京都が、そして私の勤めている同志社が一層つながり喜んでいきます。八重は、幕末のジャンヌダルクとか、会津の巴御膳とか、言われていますが、やはりいろんなネーミングの中でも「ハンサム・ウーマン」が一番良いですね。

「彼女は決して美人ではありません (she is not handsome at all)。しかし私が彼女について知っているの

は、美しい行いをする人だということです。私にはそれで十分です。彼女の話を話しすぎているとしたらお許しください。」と新島襄が、結婚前にアメリカでお世話になったハーディー夫人に手紙を書いている。そのなかの「美しい行いをする人」という意味で、内面がとてつもなくハンサムだ、と言い換えてもよいかもしれません。

八重は、新島襄と結婚して山本八重から新島八重になりました。八重子

と「子」をつけて呼ばれることもありま。この八重には、記録された著書というものがほとんどなく、全集もなく、各地に呼ばれて話した講演が少しと、自己語りのものがあるのみで、これらの書かれたものを見る限り今のところ「歌」とおぼしきものが「三十余首」ばかりあります。

それに対して新島襄には全集も整っており、それらを見ると漢詩が「五十一篇」と和歌が「五十一編」と

俳句も「十七句」ばかり残されている。八重さんの方を和歌と呼び、襄さんのものは渡航中の船の上を詠まれた歌は「短歌」と呼んだ方がいいように思われます。千三百余年続いてきた五七七七のこの形式は、今でもあまり区別なく「和歌」とよばれ、「短歌」と混交されて呼ばれています。

弘化二年（一八四五年十一月三日）八重は、福島のお津藩（今の福島県会津若松市）の砲術師範の家に生まれました。幼い時から裁縫のみならず、武家のたしなみとして読み書きそろばんや「和歌」の手ほどきや、女子としての礼儀作法を教えられる一方、長刀の稽古にも励んでいます。

- 一 年長者としやうぢのひとの言ふことに背いてはなりません。
- 二 年長者には御辞儀をしなければなりません。
- 三 嘘言うそごを言う事はなりません。
- 四 卑怯な振舞をしてはなりません。
- 五 弱い者をいぢめてはなりません。

- 六 戸外で物を食べたはなりません。
- 七 戸外で婦人と言葉を交えてはなりません。

（会津藩の「什」）

会津藩の子弟に集団生活をさせる時の「掟」である「ならぬものはならぬ」という言葉が、NHKのテレビを通して一躍有名になりましたが、男勝りの八重も兄・覚馬とともに男の子たちにつけていたのです。小さい時から男の子たちは「什」という集団生活を体験し「什の掟」の教育を受けていたのですが、その教えの最後に書かれている「ならぬものはならぬものです」と唱和することになっていました。「してはいけないことはしてはいけない」（動詞的な用法）というアクティブな意味で、おおよそはもちいられています。 「どうにもならないことはどうにもならない」（副詞的な用法）というパ

ッシブだけれども、何とも肯定的なすごい会津魂が隠されているのではないかと思います。八重はそれを諳んじていて、生涯にわたってその教えがバックボーンになったのです。

十四歳のころから兄の覚馬が江戸から持ち帰った鉄砲に興味を覚え、砲術を見よう見まねで覚え、兄に懇願して砲術も身につける。慶応四年（明治元年）八月の西軍からのお城の会津若松城が攻撃を受けた時は、籠城し、会津藩の戦士たちを助けて活躍し、つねに銃と弾薬を背負って城を駆けまわっていたといわれています。おおよそ二ヵ月で城の受け渡しが行われ、会津藩士と共に猪苗代に出発し、女であることが分かり解放されて戻ることになります。

明治四年になって先に京都に来ていた兄の山本覚馬を頼って上洛します。そして、明治九年、洗礼を受け、同志社英学校を開学していた新島襄と結婚することになります。

ほろ酔い詩歌紀行 —— 白秋「九十九島」

日高昭二

(神奈川大学教授)



北原白秋には数多くの童謡がある。

「雨がふります。雨がふる。遊びにゆきたし、傘はなし」という「雨」。

また「春は早うから川辺の葦に、蟹が店だし、床屋でござる。チョッキン、チョッキン、チョッキンナ」の「あわて床屋」などが思い浮かぶ。これは、最初の童謡集『とんぼの目玉』（大正八年）にまとめられている。「不自然な大人の心」で書かれた「教訓的」なものが多いなかで、「子どもの感覚が、どんなに鋭く、新しいか、生きてゐるか」（「はしがき」）をみてもraithたい、と意気込んでつくられた童謡である。

そうしてつくられた白秋の童謡のなかで、酒の風景をとらえたちよつと風変わりな作品がある。雑誌「赤い

鳥」の大正十年一月号に掲載された「九十九島」というのがそれで、童謡集『兎の電報』（大正十年）に収録されている。

寒い寒い晩よ、星のゐる晩よ、
むかしむかしよ、とんとのむかしよ。

大島小島が九十九と一人、
お酒のみましよ、宴会しましよ。

そこで一人が酒買ひにやられた、
海上はるばる長崎へまゐつた。

その子酒ずき、酒屋は出たが、ね、
ついと、とろんと、みな飲んで了う
た。

お目がさめたら早や夜が明けて、よ、
泣くにや泣かれず、戻ろにや遅いし。
こいつしまつた、面目ないでござる、
たうとう港にちよんぼりと留つた。

九十九島は平戸の瀬戸よ、ね、
一人長崎、それが高島よ。

そこで酒宴お流れ、
お流れ

まづまづ一貫貸しました。

「子供の感覚」がいかにか「鋭く」、
まどれだけ「新しいか」といっても、
この童謡にはいささか驚く。酒を買い
にやらされた子が、はるばる海上を長
崎まで行ったのはいいが、そこで「つ

いと、とろんと」飲んでしまつて、ただ一人港に「ちよんぼり」しているという景色には、やはり特異なものがあ

る。
この不思議な感覚が、いったいどこから来るのか、気になつてくる。そこで白秋の童謡時代を少しふりかえつてみると、この『兎の電報』と同時期にイギリスの伝承童謡マザー・グースを訳出した「まざあ・ぐうす」（大正十・十二、アルス）が刊行されていることに気づく。

マザー・グースは、いうまでもなくお母さん鴛鳥のねんねこ唄を集めたものだが、白秋はそれを初めて日本の子どもたちのために、日本の言葉に直してみたのだというが、「それはもうどんなに不思議で美しく、をかしくて、馬鹿馬鹿しくて、面白くて、なさげなくて、怒りたくて、笑ひたくて、歌ひたくなるか」（「はしがき」）、ためしてごらんと白秋はいう。こうした背景があつて、さきの「九十九島」の子どもの風景も、ようやく理解ができ

る。はるばると酒を買いにやらされた子どもの「なさげなき」と、その子どものも意外な「酒好き」を暴露した、おかしさ、面白さが、笑いたくて、歌いたくなるからである。

マザー・グースには、ワイン、ビール、ウイスキー、ブランデー、ラム酒などが出てくるが、その主役は兵隊たちで、彼らの暴飲を戒めているものが多い。なかには「おやじが財産として遺した九十九のビールびん」が、「壁から一本落ちたら残りは何本」などの数え唄があり、またハバードおばさんの唄として、次のようなものもある。

おばさん酒屋へ 行きました
犬くん にビールを 飲ましてやろう
と

だけどおばさん 帰つてみれば
犬くん椅子に かけてました

おばさん居酒屋へ 行きました
赤いワイン 白いワイン 手に入れよう
と

だけどおばさん 帰つてみれば
犬くん逆立ち してました

井田俊隆『マザーグースを遊ぶ』（本の友社）からの引用であるが、回復するリズムと、ユニークなストーリーというマザー・グースの特徴がよく示されている。それが子どもばかりか、大人の想像力を多めに刺激する。ちよつとやそつとの想像力では、とても追いつかない。それも、イギリスの子どもは、夕食が済めば、あとは大人の時間で、残るは空想で遊ぶという習慣のなかでは、なおさらのことである。白秋の「九十九島」で、酒買いにやらされた子は、この大人と隔てられて空想の時間に遊ぶ子どもたちの一人であるうが、ただし、日本の子どもは、よく買い物に行かされた。かつて私も、暗い夜道を一人、父の晩酌の酒を買いにやらされた。とはいへ、「九十九島」の子のように、途中で「とろんと、みな飲んで了うた」ということはなかったが。

喜びの一日



内野潤子

(歌人・エッセイスト)

八十歳を過ぎてからの一日は、喜びを拾うのは仲々むずかしい。

ある一日のこと、私はその日、大病院に持病の貧血のため、血小板血液など点滴を受けにゆくことになっていった。一緒に住んでいる上の娘が午前中付き添い、羽村にいる下の娘が途中のデパ地下で、おむすびのお弁当を買って来てくれる。朝大体九時半から午後二時近くまでかかるので、ベッドの上で食事もすることになる。

その朝も、八時半出発の予定で私はロールパンと紅茶や果物を食べていつもの通り仏壇にお茶とお水、それに般若心経を唱えて、ゆっくり着がえをす

る。若い時はする事が早いといつもほめられたのに、体が早く動かない。だから時間をたっぷりとって着がえをする。

外は暑くても、病院の中は適当な温度で少し肌寒い時もあるので、上から何かはおる。

ようやく仕度ができたのにその日はいつまでたっても二階の長女は下りてこない。

十分たち二十分たち次第にいらいらしてくる。何度TELしても応答なし。長女も血圧高いし、私は必死の思いで二階に上がった。

「あら、お母さんどうしたの。私寝

てたのよ」とパジャマの娘はぼかんとしている。

「あなた忘れたの。今日病院の日よ」「病院にゆくって昨日聞いていなかった」などという。「何しろついてきてね」と階段を下りる。「転ばないで、ゆっくり下りて」と声が追う。タクシーを呼んで病院には定刻についた。処置室の前で待っていれば、中に呼ばれて採血のあとすぐベッドに横になる。娘はマスクして寝不足の顔をかくし、そこまで見届けてくれる。「ありがとう」と別れる。廊下のソファで下の娘が来るまでは、本など読んでいるらしい。

それからは、時の滴しずくに刻まれて私は天井を見たり、食べたいもの考えたりする。次々に私と同じ人が入ってきて七台ほどのベッドは一ぱいとなる。只私の足元のベッドだけは、救急車用に空いていて、今日は珍しく一人の女の子が運ばれてきた。カーテンの壁がしきりにゆらゆらする。意識ない人か「○○さん」と誰かが呼びかけている。

その時カーテンが開いて、元気な下の娘がお弁当をもって現れた。「嬉しい」と言う私。

上の娘もやっとなんか解放されて「じゃあね」と帰る。下の娘は背が高くまだ若いので何事も早い。「トイレはいいの」という。がらがらと点滴袋を下げた台をもってトイレまでついて外で待っている。「お腹すかない？」という。「今何時？」と私。「十二時少し前よ」。丁度救急車の人は別の処に運ばれて静かになった。

ベッドの上のおむすびが、なぜかとてもおいしいのだ。娘が上手に広げたお弁当を、手を拭いて食べる。梅干し入りと鮭入り半分が私。副菜の玉子焼きも小さいがなんどきも柔らかくておいしい。熱いお茶を魔法瓶から注いで飲む。「おいしいなあ」と私。「お姉ちゃん忘れてたんですって」と笑う。仕事を持っている上の娘はメ切りに追われているのだ。

それから長い。午前中はまだいいのだが、娘がそっとベッドの裾に坐っ

て私の足をもんでくれる。眠くなくて、眠ると点滴が早く終る。

「あなたゆつくりコーヒーのんでいらつしゃい、私大丈夫」といつも娘を解放する。

病院の玄関先に、おいしいコーヒー店があるので、そこでゆつくりしてもらう。

三人の子、大学生二人と高校生を待っている下の娘は、大学教員の夫と高校生の末息子のお弁当を毎朝六時から作るのだ。彼女も眠い時間なのだ。二時近くようやく最後の袋が終りベッドから下りると、娘に抱えられて歩く。終った嬉しさ。主治医の女の先生にいい言葉をたくさんいただく嬉しさ。じつとしているので、体が乾ききった感じとなる。

「ソフトアイス食べたいな」と言う。娘は笑っている。

病院の出口近く、シャーベットを売る店があり、「食べよう」と二人で一つ求めて外の椅子とテーブルの上で、シャーベットを食べる嬉しさ。二人で

半分ずつが丁度よい冷たさと甘さ、娘は風に吹かれた長い髪を両手ですくい上げて笑う。まだまだ若々しい娘を一瞬美しいと思う。生きている喜びは、死の隣りに居て、優しく宝石のように光るのだ。

車にのり夕方ようやくわが家につく。家は誰もいなくて、家中の花瓶の花が新しくなっている。上の娘が変えてくれたらしい。

下の娘は、まだ朝のままの部屋を片付けてお茶をわかしながら「貧血の数値上がってよかったね」と言う。

「みんなのおかげよ」「やっぱりもつと生きていたい」と言う。「大丈夫まだ生きていられます」と娘がいつてくれる。「早く帰ってね。きつと皆まっているから」と青梅に近い家に帰る娘を送り出す。私は仏壇に向かい、先づ無事だったお線香を上げて祈っていたら、上の娘が帰ってきて背中をたたいた。「数値上がってたの」「よかった、よかった」「お母さん、ラーメン作って上げるね」と喜びの一日が終った。

「創刊一〇〇年 三田文学名作選」を読んで



宮地 智子
(詩人)

最近手にした「創刊一〇〇年 三田文学名作選」は、明治四十三年五月発行の第一号「三田文学」から、平成二十二年五月発行の創刊一〇〇年記念号までのすべての掲載作品のなかから、原則として四百字詰の原稿用紙五十枚以内のもので、物故者の作品を選出して収録してある。

森岡外の小説「普請中」で始まり、遠藤周作の追悼文「佐藤朔先生の思い出」で終わるこの大冊は、小説・評論・詩歌・俳句・随筆・戯曲・追悼文の七つのジャンルと、ところどころに編集後記や書評などが散見される、実に読みごたえのある一冊であったと同時に、さまざまな文芸上の問題点を私

に投げかけた。

例えば、昭和四十三年に掲載された阪田寛夫著「八月十五日」を呼んだ驚きは、この作品の並々ならぬ勇気とそれにも増して、この作品が、当時の「三田文学」編集人、遠藤周作の依頼で書かれたということである。その遠藤の作品「アデンまで」は昭和二十九年十一月号に掲載されていて、これも私にとって初めて見る小説である。両者に共通するものは、現実から目を逸らすことなく、人間のエゴイズムを容赦なく描いたということだろうか。一方は、外地で敗戦の詔勅を聞いた日本の兵隊達の混乱ぶり、スパイとして捉えた原地の人間に対する残忍性とし

てその極致に達する情況が克明に描かれ、一方は戦後まもなくフランスに留学した学生が体験した、人種偏見の心理と、白人の黒人に対する残忍性がリアルに描かれている。

書く人間も読む人間も共に辛い、こういういわねば、真剣勝負のような生ま生ましさは、戦争という、人類の歴史において避けて通ることのできない悲劇のもたらず文芸作品であることは確かであるが、ではいつたい、戦後六十八年、戦後復興をみごとに成し遂げたと言われる日本の現在の文芸はいつたい、健全に存在しているのであるか。

平成十九年冬季号の「編集後記」に

は、その年の「三田文学」に掲載された片山飛佑馬氏の遺作に対して千通を超えるメールと手紙が寄せられたと記した後、「たしかに、この作者の作品に示される「鬱」「自殺」「過労」はきわめて今日的テーマでしょう。しかしこの作品は死ぬことではなく、生きることを記した小説であり、編集部に寄せられたお便りの多くにも、「これを読んで生きようと思った」という文面が目立ちました。文学がたとえ世の中に役に立たないものであるとしても「小説の力」を信じつつ、今後の編集作業に携わっていきたいと願いました。」と締め括ってあつて、極めて不健全な今日的テーマに焦点を当てることによつて、かろうじて文学が息づいていることを伝えている。

思えば、このことは当然であつて、いかなる時代にあつても、現実から目を背けない限り事情は変らないのである。ところで、詩歌の三田文学一〇〇年の歴史を見ると、私には断然、女流

が光つてみえる。昭和四十二年五月号の、多田智満子の「鏡の町または眼の森」と、大正元年十二月号の、与謝野晶子「不浄——五十首」の二つである。他の二十人程の男性詩人たちは、程度の差こそあれ、何か詩を書く、う、というような気負いばかりが目について仕方がない。例えば西脇順三郎などは、今読むと、唯、言葉だけが根無し草のように浮かんでいるとしか思えないのだ。

多田智満子の作品の最終篇を引用したい。

（鏡のなかには／むかし 巨人が住んでいた／人間の顔を好んで啖らつた 百眼の巨人／彼が死ぬと／眼は種まかれ／森を生じた／見れば見るほど暗い森／その夜の奥にすわると／今でも 咀嚼する大白歯の地ひびきがきこえる）

観念的・形而上的な詩でありながら、人間という不可思議な存在の現実を見据えたうえでのリアリティーがあり、この（大白歯の地ひびき）は、し

んしんと読者に迫ってくる。

一方、与謝野晶子の歌には、三十代半ばの女の抱える哀しみ・苦しさ、が直截に歌われていて、判り易く、たまに文語であるゆえの難しさはあつても、作品の持つリアリティーは、時代を超えても色褪せることがないように思う。紙幅の許す限り引用してみた。

○子を思ふ不浄の涙身をながれ

われ一人のみ天国を墮つ

○一人居て身のうらめしさまさる時

わが黒髪に蛇のうまるる

○阿子あこと云ふ草青やかにうちしげる

園生にまろび泣寝すわれは

○よその君少しく近くよりもこよ

人香をかがみだれ心地に

○しろがねのかめにささましわが愁しみ

銀杏いんげいのいろの三十路のうれひ

○恋と云ふ根もおのれてふ枝も葉も

殺す阿子あこなるやどり木のため

○朝夕におのれあやふく思へるは

病める身よりも病みたる心